

## 近代日本の「自爆戦争」—その近因と遠因

97K003 荒井 太郎

1941年、日本は太平洋戦争に突入し、4年後の1945年8月にポツダム宣言を受諾するという形で降伏、敗戦を迎えた。日本は大国である米英両国をはじめ、ほとんど全世界の国々を相手にするという絶望的な「自爆戦争」を行った。日本は日露戦争に大勝した後、中国への圧迫や侵略行為などによりアメリカから敵視され、旧同盟国であるイギリスをも敵にまわすようになった。1930年代には完全に、孤立の道へと足を踏み入れたのだった。

なぜ日本はこのような道を選び、最終的に自爆戦争へ突入、空前の惨敗を迎えることとなったのだろうか。巻き込まれたのではない、自ら向かったのだ。負けることがわからなかったのか。いや、多分わかっていたはずである。力の差は歴然としていた。原因は何であったのか。考察してみるとしよう。

近因としてまずは、一般的に言われる「軍部の暴走」があげられる。明治維新後の日本は数十年にして、政治・経済・社会のあらゆる分野で近代化に成功し、日清・日露戦争に大勝した。しかしこの二つの戦争、特に後者の日露戦争では、圧倒的な軍事力の違いから劣勢であったにもかかわらず、近代化成功による国の勢い、政府・国民の「臥薪嘗胆」という合い言葉が勝ちをもたらしたのだったが、その中には有能な軍首脳部の血のにじむような努力と統帥、そして軍全体が「戦争に勝つ」「勝つためだけに自分たちはいるのだ」という精神があったからだと思う。軍部が国政にまで口出しすることはなく、あくまでも戦いに勝つためだけに存在し、政治家ともども勝利のために邁進すると言う考えだったのだ。

軍国日本は、日清・日露戦争時代も含めて2・26事件前までは、大日本帝国に基づく憲法秩序が支配していた。しかし2・26事件後、いやその前後あたりから日本は、法治国家とは名ばかりのまったくお粗末な、狂気に満ちた国へと変貌していった。法の下に争うことはなく、力（ここでは腕力のこと）のあるものが弱いものを暴力によってねじ伏せてしまうといった、殺伐とした世の中であった。2・26事件はそれが顕著にあらわれたものであり、あるいは「下克上」ともいえる状況であった。そしてこの時代がいかにも狂ったものであったかを決定づけたのは、政府・軍両首脳陣がこの事件を教訓にし、最善の処置をつくすといったこともせず、それどころか事件に便乗して日本の政治から自由主義と国際協調主義の勢力を一掃し、日本を一举に准戦時体制に突入させようと考えていたことである。

先に、自爆戦争突入の原因として軍部の暴走をあげたが、実は一概にそれだけではなかったのだ。軍部に助力（あるいは便乗、頼りに）していた政治家、それも首脳陣がいたわけであり、政治家と軍人が互いに意見を争うこともなく、どちらが政治家でどちらが軍人かわからなくなってしまったというような状況をつくり出し、無謀とも言える戦争への突入を迎えるに至ったわけである。

次に遠因をあげてみることにする。遠因とは間接の原因のことであるが、それは何か考えてみた。その結果、ある考えへとたどり着いた。それは要するに、「時代背景」と、それが「日

本」だったということである。詳しく説明していこう。

まずは、時代背景からふれてみる。時は1940年代、日本はナチス党のヒトラー率いるドイツ、ファシズムのイタリアと日独伊三国軍事同盟を結び、米英が中心となる民主主義国と対立していた。日本は中国への侵略を続けていたが、それを圧倒的な力を持つアメリカに阻止されようとしていた。1922年「中国に関する9カ国条約」に調印し、1929年に発動した不戦条約に前年調印していながら、軍国日本は1931年から中国への露骨な侵略を開始した。中国への日本の侵略を、18・19世紀にイギリスが行った侵略と比較したとすると、実は両国とも同じことをしていたのであった。しかしなぜイギリスは何も言われず、日本は国際社会の厳しい非難にさらされたのか。それは、間に第一次世界大戦という惨禍を経験したことにより、その前と後とは人類の戦争、平和、侵略などに関する価値観がはっきり転換した、という重大な変化があったからなのだ。大戦前の侵略は、美德ではなかったが悪徳とも考えられていなかった。ある意味で侵略する方もする方だが、される方もされる方だと考えていたのかもしれない。しかし大戦後の侵略は、する方が悪いと強く非難された。そのために、日本は米英を中心とする民主主義国家と対立し、第二次大戦へと進んでいったのだ。これが、時代背景を遠因として考える理由である。

では、もう一つの遠因である、それが「日本」だったということ述べることにする。なぜ日本だからなのか。アメリカではこうならなかったのか？イギリスでは？ソ連では？答えは、「ならなかった」である。日本は小さな島国である。近代国家になる以前は、それほど島国であることを意識もせず、苦勞も感じたことはなかつただろう。いや逆に、まわりを海で囲まれている分、侵略されにくく、かえって都合がよかつたかもしれない。しかし、一度近代国家として歩み出すと、そこには今までなかつた物が生まれ、便利になり、人々の暮らしは格段に住み易いものとなった。だがそこには今までは必要としなかつたものが必要となる状況があつた。それはエネルギーである。近代国家においてはすべての面が発展し、その中でも工業の発展が著しいものとなった。その背景として機械が発明され、人力によって行われていたものが化石エネルギーを使う機械によって使われるようになり、格段に効率がよくなつた。人々は、機械とエネルギーに依存する生活をするようになった。そしてここで、日本が小さな島国であるということに戻ってみる。当たり前であるが、日本はエネルギー資源を多く産出する国ではない。現在もその当ても他国に依存している。日本はまわりを海で囲まれているため、海上輸送によってエネルギーを輸入する。時間もかかる。もし隣国が陸続きであれば、陸上輸送によって容易に輸入できる。そして島国であり、エネルギー産出もできない日本は、対立する米・英・蘭などによる経済封鎖によって、エネルギーの枯渇が国を圧迫し始めたのだった。先にあげた国々は、そういった問題もなく、加えて当時は経済面でも世界をリードしていた強国たちである。やはり日本だから起こり得た問題であり、このことでただじっとして負けて行くなら、あえて戦って負けるといった考えになつたのだろう。島国である日本はいとも簡単に「兵糧攻め」にあい、無謀な自爆戦争へと突入していったのである。陸軍士官学校二十一期生であり、一夕（いっせき）会に参加していた石原莞爾は、「石原構想」の中で「戦争により日本の商工業に充分なる根底を養い、戦争によりかえって、国家経済の急劇なる進歩を来し」「戦争により、戦争を養う」<sup>(4)</sup>と説いているが、まったく妄想と言う他なく、戦火に飲み込まれていったのであつた。

似たようなことがドイツでもおこつていた。当時のドイツも第一次大戦の大敗の結果の賠償

により、貧国になったことへの反発からナチス党の台頭、無謀な大戦への突入という状況が生まれ、日本同様惨敗という無惨な結果を迎えるに至ったのだった。

以上、今まであげたことが日本の自爆戦争突入の近因・遠因であるが、最後に、これらをふまえた上で敗戦までの近代日本がたどった道を見つめ、自分自身がどのように考えるかを記すことにする。

まず、明治維新後の日本の奇跡的な近代化成功についてふれてみたい。日本は、世界でも類を見ないほどの速さで近代国家となった。猪木正道氏の著書の中にも、「1960年頃、“近代化”という概念は世界の社会学者の間で一大流行のテーマとなった。近代化の模範とされたのは、明治維新後の日本である」<sup>2)</sup>と書かれているように、世界が注目するほどのものであった日本の近代化は、やはり現在の日本を形作る上で重要な出来事であったに違いない。近代化なくして、現代の日本はなかったのだ。そして、この近代化と似たようなことが後の日本においてまた起こったような気がする。それは、戦後日本の復興である。これも世界に類を見ないほどの速さで、しかもアメリカに次いで世界第2位の経済大国にまで日本を押し上げた。日本が近代化に成功し、自ら自爆の道をたどった失敗を深く考えることは、これからの日本が同じ失敗を2度と繰り返さないようにするためには重要なことなのである。

例えば、現在の不況を招いた80年代以降の日本の状況は、超楽観主義的な戦前・戦中の日本の状況と似ていたような気がしてならないと考えるからだ。

軍部の台頭と時代背景により、日本は惨事の道を辿っていった。なるべくしてなったのだと言ってしまうことは、失われた人命に対して申し訳なく、直接戦争を知らない自分が勝手なことを言うのも失礼なことではある。だがしかし、こうなってしまう運命だったのではないだろうか。

無謀な道への歩みは、今考えれば阻止できたのかもしれない。時代を変えられるだけの器量を持った人が現れていたのなら。しかし、人間は弱い生き物である。強いものに従い、たとえそれが間違っただけであったとしても、間違いだと正すこともなく、なすがまま進んでいく。軍部の台頭を止めることのできた人物が現れていたのなら。歴史に「～だったら」「～れば」を言っても仕方がない。だがもし書き換えることができるのなら、書き換えた歴史ではある。しかし、今となっては残念なことだが無理なことであり、ならば私たちは、この悲劇を教訓にし、二度とこのようなことが起こらないよう一人一人が近代日本の歩んだ道を悲惨な事実として受け止め、真剣に考えていかなければならないと思う。

最後に、やはりあってはならなかった自爆戦争の歴史であり、この時代に生まれた人たちが命を失い、あるいは命は失わずともそれに類するほどの苦しみを味わっていたことを考えると、平和な現代に生まれ、何不自由なく暮らしていける私たちは、どれほど幸せであるかと痛感させられる。先人たちの苦勞が、今の私たちの幸せをつくってくれたのだと感謝の念を抱き、このレポートを終わらせることとする。

## 註

(1) 猪木正道『軍国日本の興亡』pp.173～174。

(2) 猪木正道『軍国日本の興亡』pp.4～5。

## 参考図書

猪木正道『軍国日本の興亡―日清戦争から日中戦争へ』中公新書、1995。

(国際関係史レポート指導教員 浅野幸穂)